

こうこうと月が照らす夜だった。

彼は相変わらず忙しい。

その日も、ゆうに日付変更線は超えていたが、調べ物が終わらず、午前二時を回るころ、ようやく帰宅の目処がついた。

車での帰り道、そういえば、取りに行かなくてはならないものがあつた、と唐突に思い出した。交差点に差し掛かったので、ウィンカーを出し、左折する。急な予定変更は、彼にしてはめずらしいことだった。

夜の大学といっても、研究室には多くの学生が残っており、いくつもの部屋から明かりが漏れていて、それほど暗くはなかった。しかし、研究棟を離れると、夜らしい静けさが、立ち込めていた。この大学は、自然が豊かなことでも有名であり、敷地内には、小さな森のような空間が広がっていた。ブローニュの森とまではいかないが、なかなかどうして、美しい場所であつた。

森の小道は、中央にそびえ立つ大学の図書館へと通じていた。彼はその道をゆっくりと歩いた。木々の隙間から、月の光が差し込み、彼はすこしまぶしそうに顔を上げた。今夜は十三夜だった。まもなく満月をむかえるが、まだ準備が整っていない。ふっくりとしているのに、左右対称ではない、そのいびつさが、どこか蛹に似ていた。

やがて、図書館が見えてきた。むかしながらの石作りの様相は、なかなか趣があつた。しかし、外観とは裏腹に、その図書館には最新鋭のシステムが導入されていて、関係者であれば昼夜を問わずに入館することができた。

入門ゲートにIDカードを近づけると、小さな電子音がして、扉が開いた。

彼は迷うことなく、目的の場所に歩を進めた。そこに到達するのに、それほど時間はかからないうちだった。もし途中で、彼女を見つけなければ。

「・・・・・・・・・・」

彼女の前には、たくさんの資料が山積みされていたが、当の本人は、それらに目もくれず、組んだ両腕に顔をつっふしていた。眠っているようにみえた。彼は時計に目をやらずにいられなかった。午前2時23分だった。

判断力が一瞬でも鈍ったのは、この時間帯のせいだったのかもしれない。要するに、決められなかった。近づくべきか、離れるべきか。だから、その場に立ち尽くすよりなかった。

『-----キ』

え？

だれかに呼ばれたような気がして、彼女はふっと顔をあげた。気づくと、そこは大学の図書館で、どうやらいつのまにか、眠ってしまったらしかった。無理な体勢で寝ていたらしく、首の筋が痛い。両腕を肩からあげて、伸びをした。そのまま右手で首筋を押してみると、予想以上の痛みを感じた。そうとう、凝っているようだった。

(あー。慣れないことはするものではないな。だけど、まだまだだな)

彼女は試験勉強をしていた。いや、していたはずだった。いったいいつから寝入ってしまったのか、それすら思い出せないところを見ると、勉強していた、とはいいいにくい状況だった。

しかし、おかげでだいぶ頭がすっきりしていた。いまなら、苦手教科にも手がつけられる、という気がした。

(よしっ、参考書を探してこよう)

そう思って立ち上がろうとしたとき、見覚えのない本が幾つか置いてあるのに気がついた。しかもそれは、ちょうどこれから、探しに行こうとしていたものだった。

彼女は首を傾げた。手に取ると、その重みが、決して寝ぼけて幻をみているわけではないことを教えてくれた。本当に、ここに置いてあるらしい。しかし、いくら彼女とはいえ、自分が持ってきた本を覚えていないということについては、疑った。そこまで記憶力が衰えているとは、思いたくないのだった。

とはいえ、実際にあるものはあるのだし、自分には記憶がないのだから、やはり無意識に持ってきたと考えるしかなかった。それまでのやる気が、一気に失われていくようだった。

(やっぱり、だめだな・・・こんなじゃ、ぜんぜん、だめすぎる)

ほっと息をついて、頬杖をついた。お行儀が悪いとは思いつつ、そのまま片手で参考書をパラパラめくる。さっきのやる気を取り戻さないことには、公式に立ち向かう勇気すら湧いてこなかった。

その本は、よく見ると、あちらこちらに付箋が貼ってあり、重要項目などがチェックされていた。前に読んだ人が、随分と熱心に勉強したらしい。不思議と、その流れるようなメモ書きを見ているうちに、自分もがんばろう、という気持ちが湧いてきた。どこの誰かは知らないが、自分と同じように、頑張っている人がいるという事実は、とても励まされるものだった。

「よしっ」

今度こそ、彼女は姿勢を立て直し、目を閉じて、大きく深呼吸した。次に目を開いたときには、彼女の中から余計な思考は消えていた。